研究ノート

「萌え絵問題」から「対人性愛問題」へ
――二次元性愛の抹消とトランスジェンダー差別の結びつきを踏まえて

松浦優

要旨

近年では、架空のキャラクターへ惹かれるフィクトセクシュアルについても、フェミニズムやクィアの立場から研究やアクティヴィズムが展開されている。とくに二次元キャラクターへ性的に惹かれるセクシュアリティ（二次元性愛）が、生身の人間に惹かれるセクシュアリティ（対人性愛）とは異なるものとして成立していることが論じられてきた。本稿では、二次元性愛の存在を抹消する構造的問題を理論的に精緻化するとともに、その構造がトランスジェンダー差別と結びついていることを明らかにする。

これまでの研究では、「対人性愛中心主義」がバトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」の構成要素であると論じられてきた。しかし、二次元の女性キャラクターが人間の女性と同じ「女性」であるということを所与の前提とする発想については、「問題含みなジェンダー本質主義」として批判されてきたものの、その具体的な内実が示されてこなかった。

これを踏まえて、本稿では「ヒューマノジェンダリズム」という「正当なジェンダーは生物種としての人間によって例化ないし実体化されるものだという考え方」の問題に注目する。これはシスジェンダリズムの問題提起を人間中心的な枠組みから拡張するものである。

対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムは、二次元の性的創作物のキャラクターを「字義どおり」の人間と同一視させることによって、二次元の性的創作物が三次元の人間に対する性的欲望を再生産することを可能ならしめるとともに、二次元性愛の抹消を生じさせるものである。つまり女性の抑圧と二次元性愛の抹消は同じ構造に根ざしているのである。しかしこの問題は、従来のフェミニ

ズムにおいてさえ見落とされてきたものであり、その見落としは、フェミニズムの名のもとに行われるトランスジェンダー差別とも結びついている。このことを、いわゆる「萌え絵」批判に関する分析を通して明らかにする。

キーワード：
表象主義批判、ポストヒューマニズム的パフォーマティヴィティ、対人性愛中心主義、ヒューマノジェンダリズム、クィア理論

1　はじめに

性的マイノリティをめぐっては、LGBTの可視化が進むにつれて、それ以外の性的マイノリティについても議論が進み始めている。近年ではその一例として、架空のキャラクターへ惹かれる性的アイデンティティとして、フィクトセクシュアル（fictosexuality）という言葉が使われるようになっており、現在ではフェミニズムやクィアの立場からのアクティヴィズム団体も設立されている（廖＆松浦, 2024）。

後述するように、フィクトセクシュアルに関する議論では、現実の生身の人間との性愛を「望ましい」性愛とみなす規範や、二次元キャラクターと人間のジェンダーを「同じ」ジェンダーとみなす規範に対して、批判が提起されている。こうした問題提起は、セクシュアリティとフィクションの関係、ひいては非－人間との関係について再考することを促すものである。本稿では、この問題提起をもとに、強制的（異）性愛や性別二元論といったジェンダー／セクシュアリティに関する支配的な規範を捉えるための理論的枠組みを検討し、従来のフェミニズムにおける人間中心的な議論を批判的に再考する。

2　背景――「二次元」を真剣に受け取る

2-1 クィア・スタディーズの一環としてのフィクトセクシュアル研究

フィクトセクシュアルとは、「①架空の性的表現を愛好しつつも実在の他者には性的惹かれを経験しないということ、あるいは②「性愛」や「恋愛」として一

般的に想定されるような営みを架空のキャラクターと行いたいと感じること」というセクシュアリティである（松浦, 2021b, p. 73）。

フィクトセクシュアルについては、ウェブ言説を対象とする調査や（Karhulahti & Välisalo, 2021; 松浦, 2021b）、当事者へのインタビュー調査がある（松浦, 2021a; 廖, 2024）。本稿にとって重要なのは、フィクトセクシュアルに対する差別やスティグマの存在が指摘されていることと、フィクトセクシュアルの人々の実践にクィアな攪乱が見出されていることである。

英語圏のウェブ言説の分析では、フィクトセクシュアルのなかには、他人からスティグマ化されることに不安を抱いている人もいると指摘されている（Karhulahti & Välisalo, 2021）。また、日本においてもフィクトセクシュアルに対する差別的な言説が見られる（松浦, 2021b）。とりわけ生身の人間への性的惹かれを経験しない人の場合、アセクシュアルと同じ仕方で周縁化されることがある（松浦, 2021a）。性愛は現実の人間と実践するものだという思い込みのもとで生じる差別があると言える。

また、こうした人々が存在するということは、生身の人間とは異なる存在への性的欲望が成立しているということでもある。実際に近年の調査では、二次元の性的創作物を愛好しつつ生身の（三次元の）人間には性的に惹かれない人々が存在することが示されており、そこから強制的（異）性愛を問い直す議論が提起されている[1]（Miles, 2020; 松浦, 2021a）。こうしたセクシュアリティが現に存在しているということは、人間を性的欲望の対象とすることは決して自明ではないということを暴き出すものであり、対人性愛を脱自然化するものである。

二次元という概念は、アニメ的あるいはマンガ的な表現様式やジャンルを表すものだと考えられがちである。しかし、二次元という概念を単なる「フィクション」の同義語と捉えたり、単に特殊な表現様式で人間を描いたものだと捉えたりすると、人間とは異なる存在を欲望している二次元性愛[2]について理解できなく

1　三次元の人間に対する欲望とは異なるセクシュアリティが成立しているという事実は、二次元のみに惹かれる人々の存在だけでなく、二次元と三次元の両方に惹かれるものの両者を異なるものとして経験している人々の存在からも見て取れる。

2　本稿では「二次元性愛」を「生身の人間とは異なる存在として二次元のキャラクターや物語を性的に欲望すること」という意味で用いる。そのため、二次元の存在のみに性的に惹かれる人だけでなく、二次元と三次元の両方に惹かれつつも両者が乖離している人も含まれる。またアイデンティティによる定義ではないため、「二次元性愛者」や

なる。二次元とは、生身の人間や人間の生活世界とは異なる存在物を名指す、存在論的カテゴリーとして理解する必要がある（松浦, 2022）。

二次元の（性的）創作物は、歴史的には人間を描く表現から派生したものと言えるが、にもかかわらず、人間とは異なる存在を性的に欲望するセクシュアリティを現に成立させている。そして現在では、対人性愛を相対化する議論が、アセクシュアルと共鳴する形で、二次元性愛の立場から提起されているのである（Miles, 2020; 松浦, 2021b, 2022）。

このことはジェンダーの論点とも密接に関わる。たとえばVRなどで用いられるアニメ的な「美少女アバター」に関する研究では、二次元の女性キャラクターが人間の女性と同じ意味で「女性」であるというのは自明ではない、と指摘されている（Bredikhina, 2021）。「バーチャル美少女（への欲望）が生身の人間（への欲望）と本質的に結びついているとする発想」では、上記のような二次元性愛の存在や、二次元キャラクターと人間のジェンダーが「同じ」ではないという現象が、「理解不能になってしまう」のである（松浦, 2022, p. 71）。

このように、二次元の女性キャラクターは人間－女性とは異なる存在になりうるものであり、それに対する欲望も人間－女性に対する欲望とは異なるものになりうる。そして実際に、二次元の女性キャラクターは「字義どおり」の「女性」ではない、という事態が現に生じている。このことは、ジェンダーは「生物学的」な身体にもとづく二元論的なカテゴリーだという想定を問い直すものであり、生身の人間を指向するセクシュアリティを相対化することによって、生身の人間（とくに女性）を性的対象化する文化を掘り崩すものである。しかしこうした攪乱を抹消し、二次元性愛の存在を実質的に否定する規範がある。そのひとつが対人性愛中心主義である。

「フィクトセクシュアル」などと自認していない人も含まれる。
このように暫定的に定義する理由は、本稿の主題が当事者のアイデンティティや実践ではなく、対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムという構造的問題だからである。なお、対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムへの批判は、上記のような二次元と三次元の両方に惹かれる人がいるとしても、依然として成立可能であり、かつ必要なものである。このことは、バイセクシュアルの存在を引き合いに出すことで異性愛規範への批判を無効化しようとするのがナンセンスである、ということから理解できるだろう。

2-2「〈字義どおり化〉という幻想」としての対人性愛中心主義

対人性愛とは、生身の人間へ性的に惹かれるという、性的マジョリティを名指す概念である。これは「二次元の性的表現を愛好しつつ、現実の他者への性的惹かれを経験しない」人々の立場から草の根的に使われるようになった造語である（松浦, 2021b）。これを踏まえて、対人性愛を「望ましい」セクシュアリティとみなす規範を、対人性愛中心主義と呼ぶ（松浦, 2021b）。対人性愛中心主義的な状況のもとで、二次元性愛は差別や周縁化を被っているのである（松浦, 2021b）。

対人性愛中心主義は、バトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」を構成する要素として位置づけられる（松浦, 2022）。〈字義どおり化〉という幻想とは、「解剖学的」なセックスと、「自然なアイデンティティ」としてのジェンダーと、「自然な欲望」としての異性愛が必然的に結びついているという思い込みのことである（Butler, 1990/1999, p. 135）。言い換えれば、性別二元論やシスジェンダー中心主義と異性愛規範が相互に結びついている状況を表す概念である。

しかしバトラーの図式だけでは、異性愛規範では説明できないタイプの、誰もが性的な対人関係を欲するはずだという思い込みの問題を捉え損ねてしまう。この点に問題提起をするのが対人性愛中心主義という概念である[3]。この概念はジェンダーとセクシュアリティの関係を精緻化するものでもある。すなわち、性別二元論と対人性愛中心主義が結びつくことによって、異性愛規範が構成されるのである。このように、異性愛規範と対人性愛中心主義が同じ構造に根差していることが論じられてきた（松浦, 2022）。

2-3 対人性愛中心主義批判の課題

ただし、これまでの対人性愛中心主義批判では、二次元をめぐるセクシュアリティについては理論化されているものの、二次元の存在のジェンダーについては十分に理論化されていない。たとえば松浦は、二次元の女性キャラクターが人間－女性と同じ「女性」であるということを所与の前提とする発想を、「問題含

---

3 同じく異性愛規範だけでは表せない問題として、強制的性愛（Gupta, 2015）や恋愛伴侶規範（Brake, 2012/2019）なども挙げられる。なお対人性愛中心主義への批判は、強制的性愛や恋愛伴侶規範への批判を含む形で主張されている（松浦, 2021b）。

みなジェンダー本質主義」と批判しているが（松浦, 2022, p. 72）、この「ジェンダー本質主義」の詳細については説明がない。

また、二次元の女性キャラクターは人間－女性とは異なる存在になりうるということについても、明確な理論的説明がなされていない。この問題は、二次元の物質性とジェンダーの物質性に関する考察の欠如によって生じているものである。二次元キャラクターは画面や描線によって構成されており、人間とは異なる仕方で物質化されている。しかし、このことがジェンダーの物質化においてもたらす効果は、従来の議論では見落とされてきた。

3　ヒューマノジェンダリズム――実体／表象という二分法的序列化

以上を踏まえて、本節ではジェンダーの物質性をめぐる議論を参照しつつ、「二次元のジェンダー」の物質性が抹消される問題について考察する。後述するように、シスジェンダーという特定の人間の身体のみをジェンダーの「物質的基盤」とみなす発想のもとで、トランスジェンダーの身体の物質性が否定されてきた。この発想は、人間以外の存在によるジェンダーの物質化を否定するものでもあり、これこそが先述した「問題含みなジェンダー本質主義」である。以下ではこの問題を説明するため、まずシスジェンダリズム（シスジェンダー中心主義）について手短に触れたうえで、二次元性愛を抹消するジェンダー規範として「ヒューマノジェンダズム」を説明する。そのうえで、ヒューマノジェンダリズムが異性愛規範やシスジェンダリズムと結びついていることを示す[4]。

3-1 表象主義としてのシスジェンダリズム

トランスジェンダーの立場からは、ジェンダーをめぐる従来の議論において「トランスの物質性」が抹消されてきたという問題提起がなされている（藤高, 2024a）。トランス排除的な議論は、シスジェンダーの人間の身体こそがジェンダーの「物質的基盤」であると想定しつつ、それ以外の存在に帰属されたジェンダーを「偽物」「模倣」「単なる選択」などととみなして、その正当性を格下げ

4　「ヒューマノジェンダリズム」概念は廖＆松浦（2024）で提示しているが、そこでの説明は簡素なマニフェスト的なものであるため、本稿で詳述する。そのため本稿の記述は廖＆松浦（2024）と一部重複する。

してきた。いわばジェンダーに関する「物質的なものの位階秩序」（藤高, 2024a, p. 206）が前提とされており、それによってトランスの人々の経験や存在が否定されてきたのである。

このような「物質的なものの位階秩序」への批判として提起されたのが、シスジェンダリズムやシスセクシズムという概念である（Lennon & Mistler, 2014）。ジュリア・セラーノの説明を借りれば、これは「トランスセクシュアル自身がアイデンティティとするジェンダーは、〈シスセクシュアル〉（……）のジェンダーに比べて劣っている、あるいは本物度が低いとする考え方」である（Serano, 2007/2023, p. 38）。シスジェンダリズムは性差別（sexism）には還元できないものである[5]。すなわち、性差別という概念は二項対立的な男性／女性のカテゴリーにもとづく抑圧のみを指し示すのに対して、シスジェンダリズムは男性であることと結びついた権力だけでなくシスジェンダーであることと結びついた権力をも問題化する概念である（Lennon & Mistler, 2014, pp. 63-64）。

シスジェンダリズムは、シスジェンダーの身体をジェンダーの実体とみなしつつ、トランスジェンダーの身体や実践をジェンダーに関する誤った表象とみなすものである。そのためシスジェンダリズムは、カレン・バラッドの言う「表象主義」の一例として位置づけることができる。ここで言う表象主義とは、「表象とそれが表象すると称するものとの間の存在論的な区別」を自明視する発想であり（Barad, 2007/2023, p. 70）、言い換えれば表象／実体という二分法を前提とする発想である。具体例として、文化／自然、言説／物質、ジェンダー／セックスなどの二分法を前提とする発想が挙げられる。表象主義は、反射＝反映という「光学的メタファー」（Barad, 2007/2023, p. 116）に依拠した思考をもたらすものであり、それによって微細な物質的差異化の契機を抹消するものである。

バラッドが論じているように、ジェンダーに関する表象主義を批判した先駆的な論者として、ジュディス・バトラーが位置づけられる（Barad, 2007/2023, p. 70）。バトラーは、レズビアンにおけるブッチ／フェムは単なる規範的異性

---

5 もちろんシスジェンダリズムやシスセクシズムは性差別と完全に独立しているわけではない。たとえばセラーノは、シスセクシズムがトランスフォビアやホモフォビアと同様に「二項対立的セクシズム」という「女と男はそれぞれがユニークで重複しないひとそろいの属性、適性、能力、欲求をもつ、厳格かつ相互排除的なカテゴリーだとする考え方」に根差していると指摘している（Serano, 2007/2023, p. 39）。

愛の反映や模倣や再生産ではなく、むしろ異性愛を「自然」なものとみなす見方を問題化するものだと論じている（Butler, 1990/1999, p. 219）。またバトラーは「女性性は女のものだという仮定」を痛烈に批判しつつ、「ゲイが女性性を奪取（アプロプリエーション）」する実践を「女性性を植民地主義的に「取り込（アプロプリエーション）む」もの」ではなくジェンダー・カテゴリーを不安定化させる実践として評価している（Butler, 1990/1999, p. 218）。後者の事例はトランスジェンダーに直接言及するものではないが、藤高和輝が指摘しているように、トランス排除言説への批判として引き継ぐことができるものである（藤高, 2024a, p. 85）

バトラーの理論は、規範的な男らしさ／女らしさや異性愛に似た実践であっても、誰がどのような文脈で実践するかによって、その実践がもたらす効果は変わりうるということを捉えている。こうした実践を、単なる規範的実践の反映や表象と決めつけるべきではない。そのような決めつけは、むしろ規範的な「物質的なものの位階秩序」を固定化するものであり、マイノリティの実践や存在を抹消するものだからである。

3-2 物質的攪乱——ディルド、そして二次元

とはいえバラッドが指摘するように、バトラーの理論は「人間身体の物質化」の説明に議論が限定されている（Barad, 2007/2023, p. 185）。そのためバラッドは、バトラー的なパフォーマティヴィティ論を人間以外の存在にまで拡張する。すなわち、「物質」とは「物質化が進行している最中の現象」であり、人間の身体だけでなくあらゆる物質的存在が「世界の反覆的な内部作用、そのパフォーマティヴィティを通じて問題＝物質となる」と理論化する（Barad, 2007/2023, pp. 185-186 強調省略）。

このようなポストヒューマニズム的なパフォーマティヴィティがもたらす攪乱の例として、ポール・B・プレシアドのディルド論を位置づけることができる。ディルドもブッチ／フェムと同じく、「レズビアンの（さらには女性の）セクシュアリティに男性の欲望を投影する」ものとしてフェミニズムの内部で批判されていた（Preciado, 2018/2022, p. 86）。しかしこのような批判は、あらゆる「ファルス表象」を「女性やレズビアンに対する異性愛主義権力の復活と同義」なものとみなす誤謬を犯しており（Preciado, 2018/2022, p. 90）、否定神学ならぬ

「否定－性科学」（Preciado, 2018/2022, p. 100）に陥っている。

これに対してプレシアドは、「ディルドは、それが模倣すると想定された器官に連結していないため、セックスをその「真正な」起源から逸脱させる」と主張する（Preciado, 2018/2022, p. 98）。ディルドにとっての「起源」とされるペニスや「自然」なものとみなされる規範的異性愛とは異なるあり方を、ディルドは可能にする。このように、人間の身体的な実践だけでなく、ディルドのような身体から切り離されたモノもまた、規範的なジェンダー／セクシュアリティをずらす契機となりうるのである。

これと同様のことが二次元についても言える。従来の主流的なクィア理論では、人間による自己身体を用いた実践やアイデンティティ構築の実践が注目されてきた。テリ・シルヴィオ（Silvio, 2019）は、こうした実践に注目するパラダイムを「パフォーマンス」のパラダイムと呼び、その例としてバトラーのパフォーマティヴィティ論を挙げている[6]。主流的なクィア・スタディーズでは、人間に帰属されるジェンダーやセクシュアリティが議論されがちであったため、こうした「パフォーマンス」的な実践に議論が偏ってきた。

しかし二次元キャラクターの構築は、自己を構築する実践ではなく、生身の人間とは異なる存在に魂を吹き込む実践である。このタイプの実践を、シルヴィオは「アニメーション」と概念化した（Silvio, 2019）。松浦はこれを踏まえたうえで、人間の身体的実践がもたらすものとは異なるタイプの攪乱が、「非－人間的アクター（記号・言語、メディアの物質性など）がもたらすずれ」によって引き起こされうると指摘する。それこそが、「以前には存在しなかったカテゴリーの存在物をアニメーションによって構築することを通して、知覚の仕方や欲望のあり方を変容させる」という「アニメーション的な誤配による攪乱」である（松浦, 2022, p. 68 強調省略）。

これによって生じる「ジェンダー・トラブル」の一例が、「二次元美少女を生身の女性とは異なるカテゴリーの存在物とする認識」が成立するという現象である（松浦, 2022, p. 68）。これは「女性性のステレオタイプとしてアニメートさ

---

6 シルヴィオはバトラーを「パフォーマンス」のパラダイムに位置づけ、「アニメーション」から切り離している。しかしアニメーションはバラッド的なポストヒューマニズム的パフォーマティヴィティの一種とみなすほうがよい。

れた」ものでありながら、にもかかわらず「女性から切り離されて独立し、女性とは異なる存在物になる」という動的な変容である[7]（松浦, 2022, p. 68 強調省略）。このような現象は、「異なる内部作用は異なる現象を生み出す」（Barad, 2007/2023, p. 82）というバラッドの指摘とも対応している。つまりこうした攪乱は、生身の人間の身体とは異なる仕方でジェンダーが物質化されることによって生じるずれなのである。そして二次元性愛の成立もこの一環として位置づけることができる。先述した調査が示しているように、こうした攪乱は単なる理論的な思弁ではなく、現に生じているものなのである。

3-3 ヒューマノジェンダリズム

とはいえすでに説明したように、こうした攪乱を抹消する規範の存在が指摘されている。バラッドに倣って言えば、「問題＝物質となることから排除される身体＝物体」（Barad, 2007/2023, p. 82）をめぐる、構成的排除の問題である。

> 「二次元キャラクターが字義どおりには人間ではない」という存在論的差異がどうでもいいことだと他者から認識されると、「キャラクター性愛者」は単なる異性愛者あるいは同性愛者とみなされてしまい、実質的に存在を抹消される。また美少女アバター実践も同様に、単に女性を模倣しているものとみなされてしまう。（松浦, 2022, pp. 68-69）。

これまでの研究では、上記のような抹消をもたらす構造的問題として「〈字義どおり化〉という幻想」を再概念化し、その構成要素として「対人性愛中心主義」を位置づけてきた（松浦, 2022）。しかし本稿で強調したいのは、「〈字義どおり化〉という幻想」を構成するもうひとつの要素として、ヒューマノジェンダリズムと呼ぶべき問題が存在することである（廖＆松浦, 2024）。

ヒューマノジェンダリズム（humanogenderism）とは、正当なジェンダーは生物種としての人間によって例化ないし実体化されるものだという考え方である。ジェンダーを帰属されるのは人間のみであり、いわば人間のみがジェンダー

---

7 これはまさにバトラー的な、「『二つのジェンダー』がその特権的な意味を失ってしまうくらいジェンダーを増やそう、という戦略」（藤高, 2024b, p. 155）である。

を持つ存在とされる。そして人間以外の存在がジェンダー化されるとき、そのジェンダー化された事物は人間のジェンダーを指し示す表象として取り扱われる。言い換えれば、人間以外の存在がジェンダーを「持っている」場合、その存在は単なる人間の男性／人間の女性の模倣やコピーとして、付随的な存在として扱われるのである。

もちろん、人々が人間以外の存在にジェンダーを帰属することはあるだろう（西條, 2019）。しかしそのような実践を解釈する際には往々にして、ジェンダーを帰属された対象が人間とは異なる存在であるということが無意味な要素として扱われている。ヒューマノジェンダリズムのもとでは、ジェンダーを担う存在の物質性が無意味化されてしまうのである。

ヒューマノジェンダリズムは、人間中心的な性別二元論であり、ジェンダーを生物種としての人間の身体へと縛り付けるものである。言い換えれば、これはジェンダーに関する表象主義であり、ある種の「生物学的」本質主義であり、そして「物質的なものの位階秩序」でもある。そしてこれはシスジェンダリズムや二項対立的セクシズムには還元できないものだが、それらが前提としているものなのである。

実際に、ヒューマノジェンダリズムは規範的なジェンダーやセクシュアリティのあり方を支えるために動員されることがある。たとえば、非ヒト動物の生殖活動に関するドキュメンタリー番組では、しばしば動物を粗雑に擬人化し、人間の社会におけるジェンダー規範を動物へ安易に投影することによって、規範的な生殖的異性愛が強調されてきた（Halberstam, 2011/2024, pp. 48-60）。そこではジェンダーやセクシュアリティに関する規範を再生産したり、オルタナティブなあり方の探究を抹消したりするものとして、ヒューマノジェンダリズムが機能しているのである。

さらにヒューマノジェンダリズムは性的マイノリティを周縁化するものである。たとえば対物性愛者のなかには、自身の愛する物に性別があると感じており、愛する物を「それ」（it）と呼ぶのは相手を格下げすることだと考えている、という人がいる（Terry, 2010, p. 38）。このような営みは、しばしば愛する物を「擬人化」しているとみなされる。しかし対物性愛者は物を通して人間を愛したり欲望したりしているのではなく、物そのものを指向している。にもかかわら

ず、物にジェンダーを帰属する営みは安易に「擬人化」とみなされ、対物性愛というあり方が抹消されてしまうのである。先述したディルドや二次元の物質性が抹消される状況でも、これと同じことが起きていると言える。

4 「反映」や「表象」とみなすアプローチに内在する構成的排除

ここまで論じてきたように、対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムは、二次元性愛の存在を抹消する規範であり、「アニメーション的な誤配による攪乱」を打ち消す力学である。そのため、対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムは、二次元の性的創作物が対人性愛を再生産することを可能にするものだと言い換えられる。本節では、こうした問題がフェミニズムにおいてさえ見落とされてきたことを確認し、その見落としがいかに性的マイノリティを周縁化するものであるかを考察する。そのため本節では、主流的なフェミニズムにおける議論の特徴が明確に表れているトピックとして、「女性性」や「女性の表象」に関する議論に焦点を絞って議論を行う。

4-1 いわゆる「萌え絵」批判

二次元の女性キャラクターを性的に強調して描いた創作物や、二次元の女性キャラクターを性的に被虐的に描いた創作物に対しては、フェミニズムの観点から批判がなされてきた[8]。たとえば、女性の身体を性的なものと意味づけるものだという批判や（小宮, 2019）、女性を性的モノ化するという批判（李, 2023）、あるいは男性の性差別的偏見や性加害行為を助長するという批判（森田, 2012; 李, 2023）がなされてきた。また、そのような創作物を目にした女性が精神的なストレスやダメージを負うという批判もなされてきた（森田, 2012; 小宮, 2019）。

これらの批判は、いずれも実写のポルノグラフィに対する批判や、自然主義的なヌード絵画への批判と同じ理論にもとづくものである。たとえばポルノグラフィは、「女性が何のために存在すると言われるか、どのようなものとして見られるか、どのようなものとして扱われるかを確立」したり、「女性に対して何が

---

8 こうした議論の整理については、難波（2020）を参照。なお似たような批判は「性的」イメージの押しつけだけでなく、「可愛さ」や「受動的な性格」というイメージの押しつけに対してもなされてきた。ヒューマノジェンダリズム概念による問題提起は、こうした性的でないイメージの押しつけに関する議論にも当てはまるものである。

できるかという観点から、女性とは何であり、何でありうるかを構築」したり、「女性に対してできることという観点から、男性とは何であるかを構築」すると批判されてきた（MacKinnon, 1996, p. 25）。

あるいは、西洋美術における女性のヌード絵画は、「モノではないもの――つまり女性――をモノであるかのように、とくに、性的なモノであるかのように表象する」ことによって女性をモノとしてエロス化しているとして（Eaton, 2012, p. 286）、そして「表象された女性（……）を第一義的に性的なモノとして『見る』」メイル・ゲイズ（male gaze）を再生産するとして（Eaton, 2012, p. 293）、批判されてきた。

先に挙げた批判は、いずれもこのような理論を二次元表現に適用するものである。しかしながら、このような理論はいずれも、人間－女性が構築される仕方を考察するものであり、人間とは異なる存在が構築される可能性を想定していないのである。

4-2「二次元か三次元かは関係がない」という構成的排除

ここで重要なのは、二次元の創作物に対するフェミニズム的な批判もまた対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムを自明のものとして温存してしまっているという問題である。上記のような批判では、二次元の創作物にも実写表現と同じ批判を適用できるという認識が、自明の前提になっている。なかには「二次元か三次元か」の区別は「フェミニズムによる表象批判とはあまり関係がない」と明言するものさえある（小宮, 2019, p. 236）。

「二次元の女性キャラクター」を構築する実践は、なぜ「人間の女性」の構築へと横滑りするのか。なぜ人間の女性が二次元の女性キャラクターを自分と「同じ女性」だと認識する状況が生じているのか。なぜ人間の女性と二次元の女性キャラクターとを結びつける「意味的連関」（小宮, 2019）が成立可能となるのか。従来の議論はいずれも、このような問いをあらかじめ排除しており、二次元性愛を抹消する構造の問題を無視してしまっているのである。

さらにこのことによって、従来のフェミニズム的な批判は、人間－女性と二次元の女性キャラクターが異なるジェンダーとなっていく可能性をあらかじめ締め出してしまっている。つまり皮肉なことに、従来のフェミニズム的表象批判は、

二次元の女性キャラクターを人間の女性と結びつける意味連関を、むしろ強化・再生産してしまっているのである。そして結果的に、対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムという、批判すべき問題にむしろ加担してしまっているのである。

従来のフェミニズム的な議論において、二次元の女性キャラクターは、単なる人間－女性の「表象」であると自明視されており、物質的な実体として認められていない。このような実体／表象という存在論的な序列化のもとで、「女性なるもの」は人間の女性のものだという問題含みな想定が持ち込まれ、結果的に生物学的本質主義が暗に温存されてきたのである。そしてこの枠組みにおいて、二次元の女性キャラクターを欲望することは、あくまで二次元の創作物をとおして「人間」の「女性」を欲望しているのだと位置づけられてしまう[9]。論者の意図にかかわらず、「表象」分析的な枠組みは二次元の存在そのものを欲望するセクシュアリティを抹消するものなのである[10]。

4-3 トランスフォビアとの結びつき――反差別のレトリックを動員する差別

さらに注目すべきは、二次元性愛の抹消は、トランスフォビアと同じ構造に根差しているという点である。これまで述べてきたように、二次元性愛とトランスジェンダーはいずれも「〈字義どおり化〉という幻想」のもとで周縁化されている。言い換えれば、いずれもジェンダーを「解剖学的」な「身体」によって基礎づけようとするイデオロギーによって、存在を否定されるものなのである[11]。

---

9 ここでは、ヒューマノジェンダリズムによって対人性愛中心主義がもたらされるケースを説明したが、ヒューマノジェンダリズムのほうが対人性愛中心主義よりも根源的な構造だというわけではない。たとえば「性的欲望の対象は人間であるはずだ」という発想にもとづいて、「それならば二次元キャラクターは人間（の表象）だろう」という考えに至ることもある。ヒューマノジェンダリズムと対人性愛中心主義は、どちらか一方がより基礎的なものだというわけではない。

10 本節で指摘した問題は、二次元の性的創作物の法規制を求めない仕方での倫理的非難でも同様に生じるものである。つまり法規制に反対しながら二次元の性的創作物を「問題」とみなす主張にも含まれるものである。

11 個々人のレベルでは、二次元性愛を擁護しつつトランスジェンダーを差別する人もいるし、その逆もいる。個々人が二次元性愛差別的言動やトランス差別的言動にいたる原因は多様であり、単一の要因で規定されるわけではない。本稿の主張は、二次元性愛差別とトランスジェンダー差別が構造的に同根であるということであり、片方のみを差別するのは一貫した立場として成立しえないということである。

実際に、レトリックのレベルにおいても、二次元性愛の抹消とトランスフォビアには同型の言説が見られる。そのひとつが、女性のモノ化[12]というレトリックである。トランス排除派フェミニストの代表的論者であるキャスリーン・ストック[13]は、女性をモノ化する文化が「トランスの女性を女性との関係で考える際の捉え方にも関係している」としたうえで、「女性をモノ化する文化的イメージ」が男性のオートガイネフィリアを助長すると主張している[14]（Stock, 2021）。これと同型のトランスフォビアのレトリックとして、美少女アニメがオートガイネフィリアを助長することによってトランス女性を生み出している、という言説がある[15]。これはトランスジェンダーと二次元性愛が同時に周縁化される一例にほかならない。

また、「女性性は『生物学的女性』のものだ」というレトリックも挙げられる。実際に、トランス女性も二次元の女性キャラクターを愛好する男性も、「男性」が女性性を簒奪（アプロプリエーション）するものだと非難されることがある。たとえばセラーノが論じているように、トランス女性は「女」を戯画化しており、女性のステレオタイプを強化していると非難されることがある。あるいは、トランス女性は女性性を性的に欲望する男性だという主張も、トランス差別の常套句である（Serano, 2021）。これと同様に、「女性性の記号」を性的に欲望することを「女を性欲の道具としか見なさない」ミソジニーだとみなす発想にもとづいて（上野, 2018, pp. 11-12）、二次元の女性キャラクターを欲望することもまた「男権主義的な性幻想を再生産している」と非難されることがある（上野, 2018, p. 99）。

こうしたレトリックは、女性性は「女」（あるいは「シスジェンダーの人間－女性」）のものであり、「女」以外が女性性を流用することは差別だという構図になっている。そこでは女性性を物質化する仕方の多様さは決して認められず、むしろ女性性の意味やあり方が変容する可能性を打ち消してしまっている。つまり本稿3.2で挙げたような攪乱をあらかじめ締め出しているのである。そしてそのとき、トランス女性は「女性性を装う男性」とみなされ、二次元性愛は「ただの

---

12 （性的）モノ化とは何かについては、鈴木（2023）を参照。
13 ストックのモノ化論は、たとえば李（2023）でも参照されている。
14 ストックに対する批判についてはセラーノ（Serano, 2021）を参照。
15 「英語圏における「美少女アニメのせいでトランスジェンダーになる」言説の事例メモ」https://mtwrmtwr.hatenablog.com/entry/2023/12/08/211602,（2024年7月25日取得）。

対人（異）性愛」とみなされ、存在を抹消されるのである。

これに加えて、もうひとつの典型的なレトリックが、歴史的な経路依存関係を本質主義的な基礎づけ関係にすり替えるレトリックである。これは「なぜ女性性を使うことにこだわるのか」という非難として現れるものである。たとえばトランス排除的フェミニストからは、ジェンダーをなくすべきなのにトランス女性はむしろ「女性」というジェンダーを存続させている、と主張されることがある。あるいは古典的には、ブッチ／フェムを異性愛的価値観に囚われた存在とみなす非難も挙げられる。これと同様に、二次元の女性キャラクターは依然として現実の女性と有縁的なものであり、二次元の女性キャラクターへの欲望は人間－女性から切り離されてなどいないのではないか、と疑問視されることがある（松浦, 2022, p. 71）。

しかしこのような疑念は、歴史的経路依存関係と、本質主義的基礎づけ関係を混同するものである。先述したように、二次元の性的表現は人間の性愛を描写する絵画やマンガから発展してきたものであり、その意味で歴史的には対人性愛文化のなかから生み出されたものであるが、それにもかかわらず、現在では二次元への欲望は対人性愛と異なるものとして成立している。歴史的な（必然的でない）関連性があるからといって、それが非－歴史的な本質であるとは言えないのである。

二次元の女性キャラクターと人間－女性には、歴史的な経路依存という意味での関係はあるが、しかし一方が他方を基礎づけるような関係ではないし、ましてや「女性」なるものの非－歴史的な本質が存在するわけではない。ジェンダーとセクシュアリティのあり方は変化に開かれており、その変化は現に生じている。そのような、現に存在する人々を抹消しない形での議論が必要なのである。

4-4「萌え絵問題」から「対人性愛問題」へ

二次元の性的創作物を愛好する営みは、あたかも（現実の）女性や子どもと対立するかのように論じられてきた（e.g. 李, 2023）。しかしそれは誤った対立図式であり、むしろ両者はともに、「〈字義どおり化〉という幻想」という同じ構造によって問題を背負わされているのである。すなわち、二次元の性的創作物のキャラクターを「字義どおり」の人間と同一視させることによって、二次元の性的創

作物が三次元の人間に対する性的欲望を再生産することを可能ならしめるとともに、二次元性愛の抹消を生じさせるものこそが、対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムの力学なのである。

二次元性愛の存在を抹消する規範と、二次元美少女を通して規範的な対人（異）性愛や女性の性的モノ化を再生産することを可能ならしめる規範は、同じものである。つまり女性の抑圧と二次元性愛の抹消は同じ構造にもとづく問題である。だからこそ、二次元性愛の運動とフェミニズムの運動は連帯するべきなのである。

にもかかわらず従来の議論では、対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムという問題が等閑視されたまま、二次元の性的創作物ばかりに非難が向けられてきた。このような疑似対立を避けるために、いわゆる「萌え絵」をめぐるフェミニズム的な論点は、対人性愛を基準とする社会がもたらす問題だということを認識する必要がある。言い換えれば、いわゆる「萌え絵問題」とされているものは、実際には「対人性愛問題」なのである。

二次元性愛は現に存在する。にもかかわらず、従来の議論では、対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムは所与の前提として暗に温存されており、あたかも性差別や異性愛規範のみが批判すべき「構造的問題」であるかのように論じられ、そして二次元性愛の存在が実質的に否定されてきた。このような枠組みでの議論は、結果的に、二次元美少女を二項対立的セクシズムや異性愛規範と本質的に結びついたものとして扱うものとなってしまう。そしてそれは、非対人性愛の存在を抹消し、二次元がもたらす攪乱を抹消し、異性愛規範や二項対立的セクシズムが揺らぐ可能性をあらかじめ抹消してしまうものなのである。

同時に強調しておきたいが、二次元性愛の抹消は決してフェミニズムだけの問題ではなく、反フェミニズム的な立場でも生じるものである。たとえば、仮に二次元性愛の承認が進んだとしても、二項対立的セクシズムが維持されたままでは、二次元の女性キャラクターを愛好する男性は「異性愛男性」としてホモソーシャルな集団で「承認」を得ることになるかもしれない。しかしそこでの「承認」は、あくまで対人（異）性愛に包摂することによるかりそめの「承認」でしかない。そのとき、「承認」と引き換えに二次元であることの意義が抹消され、実質的に対人性愛中心主義が温存される。二次元性愛が真に二次元性愛として存

在することが可能となるためには、二項対立的セクシズムも批判しなければならない。言い換えれば、二次元性愛の周縁化を批判するためには、同時にフェミニストでなければならないのである。この意味で、「二次元性愛を擁護する反フェミニズム」という立場には一貫性がないと言える[16]。

5　結論および本稿の射程

本稿では、二次元性愛を周縁化する規範として対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムを提示したうえで、これらをバトラーの「〈字義どおり化〉という幻想」やバラッドの「表象主義」の一環として位置づけた。二次元の性的創作物のキャラクターを「字義どおり」の人間ないし人間の「表象」として構築することによって、二次元の性的創作物が三次元の人間に対する性的欲望を再生産するという現象を可能ならしめるとともに、二次元性愛の抹消を生じさせるものこそが、対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムなのである。

だからこそ、仮に二次元の女性キャラクターを用いた創作物が問題含みなジェンダー規範や女性の性的モノ化を再生産するとしても、その原因として二次元の創作物を「問題」とみなすのは不適切である。そのような枠組みでの議論は、①ジェンダーやセクシュアリティに関する構造的問題を無視してしまう、②二次元性愛の存在を実質的に抹消してしまう、③二次元の性的創作物をめぐる文化が対人性愛を相対化する見方を生み出したという、現に生じている攪乱を抹消してしまう、④二次元の女性キャラクターを人間の女性と結びつける意味連関をむしろ強化してしまう、という点で問題含みなものである[17]。

現在の社会において「性的／恋愛的創作物ばかりが問いの対象にされる一方

16　しばしば二次元の性的創作物を愛好することと反フェミニズムとが親和的なものとなっていると言われることがあるが、両者の親和性もまた決して本質的なものではない。重要なのは、両者の結びつきをいかにして断ち切るかである。本稿は、二次元の（一見すると「政治的に正しくない」と思われがちな）性的創作物を愛好するからといって、フェミニズムに対抗する必要はない、ということを明示するものである。その意味で本稿の作業は、人々がフェミニズムにたどり着く新たな経路を切り開くとともに、反フェミニズムに陥る筋道を断つものと言える。

17　対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムは、二次元の創作物を取り巻く「マクロな文脈」（難波, 2020）に属するものであり、二次元の創作物に関する議論全般に関連するものである。そのため本稿の結論は、たとえば広告表現か否か等を問わず適用されるべきものである。

で、対人性愛が自明視され続けている、という非対称性」（松浦, 2021b, p. 76）が強固に存在する、ということを直視しなければならない。また、対人性愛を基準とする価値判断を二次元性愛に当てはめようとすることは、二次元性愛の実践に即さないのみならず、二次元性愛の存在を否定することにつながるものである。さらに二次元性愛の抹消はトランスジェンダー差別と同じく「〈字義どおり化〉という幻想」に根ざしており、両者の差別には共通する論理も用いられている。従来の素朴な「萌え絵」批判が「フェミニズム」の名のもとに行われる差別に陥っていたのではないか、という批判的な検討が必要である。

従来の議論では、「現実と虚構を区別すべき」という主張は、「虚構もまた現実の反映や表象なのだ」ということを理解していないものとして退けられてきた。しかしながら、「二次元の女性キャラクターは人間の女性の『表象』である」ということを不変の前提であるかのように考える見方は、虚構的キャラクターが人間とは存在論的に異なるものとなる可能性をあらかじめ抹消してしまい、対人性愛のみが「セクシュアリティ」という考慮すべきものなのだという発想を温存してしまうものなのである。

これは研究の方法論的な問題でもある。メディア表現に関するジェンダー／セクシュアリティ研究は、表象内容や表現のコード（およびその制作と受容における意味づけの仕方）を分析してきた。しかし表象や意味のみに着目するアプローチでは「方法論上不可避的に（……）物質的な違いが関与するものを切り捨ててしまう」（松浦, 2024, p. 191）。つまりそのようなアプローチでは、二次元の存在を単なる表現とみなしてしまうことになり、二次元性愛の存在を抹消してしまうものである。この問題を避けるためには、二次元というカテゴリーのものが存在する、という物質的・存在論的アプローチが必要なのである。

本稿では（とくに男性が）二次元の女性キャラクターを欲望する事例に焦点を当ててきた。しかし対人性愛中心主義批判やヒューマノジェンダリズム批判は、たとえば女性が女性キャラクターを愛好する営みや、あるいは男性キャラクターを愛好する営みにとっても重要なものである。

たとえば「男性向けポルノコミックを読む女性」のなかには、「男性向けポルノコミックは男性が描く“疑似女性”であるから、自分とは切り離された別のものとして見ることができるので、ファンタジーとして受け止めやすい」という人

もいる（守, 2010, p. 192）。守はこれを単に「読み方」の論点として説明しているが、むしろ存在論的に、読者の女性とポルノコミックの“疑似女性”が同じ女性ではない、という状況が生じていると捉えられる。それに対して、対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムは、こうした状況や、こうした表現を欲望する女性を理解不能にしてしまうものである。

同じことは二次元の男性キャラクターを愛好する営みにも言える。たとえば、いわゆる「オレ様キャラ」的なキャラクターを愛好している人々は、「オレ様」的な支配的態度をとる生身の男性を好んだり肯定したりするわけではない。にもかかわらず、二次元と三次元の違いを無意味なものとしてしまうと、あたかもこうした人々が現実でも支配的な男性を好んでいるかのような認識をもたらしかねない。とりわけ「オレ様キャラ」を愛好する人に女性が多いことを考えれば、こうした誤認を避けることはフェミニズム的にも重要である（廖＆松浦, 2024）。

さらにBLを単純に「ゲイ男性」の表象とみなす議論においても、対人性愛を前提とする発想が無批判に温存・助長されてきたと考えられる。東園子が指摘しているように、「やおい」は「無機物の間にカップリングを設定する遊び」と「地続き」のものでもあるが（東, 2015, p. 208）、このことが真剣に扱われてきたとは言い難い。BLを「ゲイ男性」に関する「表象の横奪」と捉える発想自体が、対人性愛中心主義とヒューマノジェンダリズムをあらかじめ前提としていないか、批判的検討が必要である。とりわけBLへの非難がトランスフォビアと結びついている状況（e.g. 金, 2019; Aburime, 2024）を鑑みれば、生身の人間によってジェンダーやセクシュアリティを基礎づける考え方の問題は、BL研究においても喫緊の課題だと言える[18]。

最後に本稿の議論は、たとえばドールやロボットとの性愛のような、二次元以外の非対人性愛にも関わるかもしれない。本稿で論じてきたように、ジェンダーやセクシュアリティをかたくなに人間の身体へと結びつけ、そして人間の身体によって基礎づけようとする力学が存在する。今後はこの力学にこそ批判を向けていかなければならない。

---

[18] 対人性愛中心主義やヒューマノジェンダリズムの問題提起がBL論にもたらす示唆については、松浦（2025）を参照。

References

Aburime, S. (2024). The influence of transphobia, homonationalism and anti-Asian prejudice: Anti-BL attitudes in English-speaking fandoms. *East Asian Journal of Popular Culture*. online first (2). https://doi.org/10.1386/eapc_00119_1

Barad, K. (2023).『宇宙の途上で出会う：量子物理学からみる物質と意味のもつれ』（水田博子・南菜緒子・南晃訳）. 京都：人文書院. (Original work published 2007).

Brake, E. (2019).『最小の結婚：結婚をめぐる法と道徳』（久保田裕之監訳）. 東京：白澤社. (Original work published 2012).

Butler, J. (1999).『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（竹村和子訳）. 東京：青土社. (Original work published 1990).

Bredikhina, L. (2021). Virtual Theatrics and the Ideal VTuber Bishōjo. *REPLAYING JAPAN*, *3*, 21–32.

Eaton, A. W. (2012). What's Wrong with the Female Nude? A Feminist Perspective on Art and Pornography. In *Art and Pornography: Philosophical Essays* (pp. 277–308). Oxford University Press.

Gupta, K. (2015). Compulsory Sexuality: Evaluating an Emerging Concept. *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, *41*(1), 131–154.

Halberstam, J. (2024).『失敗のクィアアート：反乱するアニメーション』（藤本一勇訳）. 東京：岩波書店. (Original work published 2011).

Karhulahti, V. M., & Välisalo, T. (2021, January 12). *Fictosexuality, Fictoromance, and Fictophilia: A Qualitative Study of Love and Desire for Fictional Characters*. Frontiers in Psychology; Frontiers Media S.A. https://doi.org/10.3389/FPSYG.2020.575427/FULL

Lennon, E., & Mistler, B. J. (2014). Cisgenderism. *TSQ: Transgender Studies Quarterly*, *1*(1–2), 63–64.

MacKinnon, C. (1996). *Only Words*. Harvard University Press.

Miles, E. (2020). Porn as practice, porn as access: pornography consumption and a 'third sexual orientation' in Japan. *Porn Studies*, *7*(3), 269–278.

Preciado, P. B. (2022).『カウンターセックス宣言』（藤本一勇訳）. 東京：法政大学出版局. (Original work published 2018).

Serano, J. (2021). *Autogynephilia and Anti-Transgender Activism*. Medium. https://juliaserano.medium.com/autogynephilia-and-anti-trans-activism-23c0c6ad7e9d

Serano, J. (2023).『ウィッピング・ガール：トランスの女性はなぜ叩かれるのか』（矢部文訳）. 東京：サウザンブックス社. (Original work published 2007).

Silvio, T. (2019). *Puppets, Gods, and Brands: Theorizing the Age of Animation from Taiwan*. University of Hawai'i Press.

Stock, K. (2021). *Material Girls: Why Reality Matters for Feminism*. Fleet.

Terry, J. (2010). Loving objects. *Trans-Humanities Journal*, *2*(1), 33–75.

廖希文.（2024）.〈紙性戀處境及其悖論：情動、想像、賦生關係〉劉定綱・李衣雲編《故事與另外的世界：台灣ACG研究學會年會論文集1》奇異果文創事業有限公司, 169-210.

東園子.（2015）.『宝塚・やおい、愛の読み替え――女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社.

藤高和輝.(2024a).『ノット・ライク・ディス――トランスジェンダーと身体の哲学』以文社.
藤高和輝.(2024b).『バトラー入門』筑摩書房.
金孝眞.(2019).「フェミニズムの時代、BLの意味を問い直す――二〇一〇年代韓国のインターネットにおける脱BL言説をめぐって」ジェームズ・ウェルカー編『BLが開く扉――変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』青土社, 47-75.
小宮友根.(2019).「表象はなぜフェミニズムの問題になるのか」『世界』(920): 228-36.
李美淑.(2023).「炎上する「萌えキャラ」/「美少女キャラ」を考える」李美淑・小島慶子・治部れんげ・白河桃子・田中東子・浜田敦子・林香里・山本恵子, 『いいね!ボタンを押す前に――ジェンダーから見るネット空間とメディア』亜紀書房, 94-125.
廖希文, & 松浦優.(2024).「増補 フィクトセクシュアル宣言――台湾における〈アニメーション〉のクィア政治」『人間科学共生社会学』(13): 1-37.
松浦優.(2021a).「二次元の性的表現による「現実性愛」の相対化の可能性――現実の他者へ性的に惹かれない「オタク」「腐女子」の語りを事例として」『新社会学研究』(5): 116-136.
松浦優.(2021b).「日常生活の自明性によるクレイム申し立ての「予めの排除/抹消」――「性的指向」概念に適合しないセクシュアリティの語られ方に注目して」『現代の社会病理』(36): 67-83.
松浦優.(2022).「メタファーとしての美少女――アニメーション的な誤配によるジェンダー・トラブル」『現代思想』50(11): 63-75.
松浦優.(2024).「エンコーディング/デコーディング論の脱 – 人間中心化――物質的な誤配のメディア理論」『年報カルチュラル・スタディーズ』12: 173-195.
松浦優.(2025).「BL的想像力をめぐって(第5回)――対人性愛中心主義を問い直す」『SFマガジン』66(1): 319-325.
守如子.(2010).『女はポルノを読む――女性の性欲とフェミニズム』青弓社.
森田成也.(2012).「ポルノグラフィと性被害」ジェンダー法学会編『講座 ジェンダーと法 第3巻 暴力からの解放』加除出版, 201-216.
難波優輝.(2020).「キャラクタの画像のわるさはなぜ語りがたいか――画像のふたつの意味と行為の解釈」『フィルカル』5(2): 82-107.
西條玲奈.(2019).「人工物がジェンダーをもつとはどのようなことなのか」『立命館大学人文科学研究所紀要』120: 199-216.
鈴木英仁.(2023).「性的モノ化とはなにか、(不正だとして)なぜ不正なのか」『フィルカル』8(3): 202-219.
上野千鶴子.(2018).『女ぎらい――ニッポンのミソジニー』朝日新聞出版.

Abstract

From the “Moe-Image Issue” to the “Human-oriented Sexualism Issue”: Considering the Connection Between the Erasure of Nijigen Sexuality and Discrimination Against Transgender People

Yuu Matsuura

In recent years, feminist and queer research and activism have examined fictosexuality, which is the sexual attraction to fictional characters. It has been noted that “ Nijigensexuality,” or attraction to two-dimensional (*nijigen*) characters, is different from “human-oriented sexuality,” or attraction to real people. This paper explains the structural issues that exclude nijigen-sexuality and shows that this exclusion is rooted in the same structure as transgender discrimination.

Previous studies have argued that “human-oriented sexualism” is part of what Butler calls “literalizing fantasy.” However, the assumption that the term “women” in reference to nijigen “women” characters must necessarily have the same meaning as “women” when referring to human women has been criticized as “problematic gender essentialism,” but this criticism has not been detailed.

This paper introduces the concept of “humanogenderism,” defined as the idea that legitimate gender is instantiated or materialized by humans as a biological species. This concept modeled after cisgenderism, refers to anthropocentric gender binarism.

By equating nijigen characters with “literal” human beings, both human-oriented sexualism and humanogenderism facilitate the reproduction of sexual desire for (three-dimensional) humans through nijigen sexual creations, erasing nijigensexuality. In other words, the oppression of women and the erasure of nijigensexuality originate from the same structural framework. However, this issue has been largely overlooked, even within mainstream feminism.

Furthermore, this oversight is linked to instances of transgender discrimination carried out under the banner of feminism. This paper examines these dynamics through an analysis of the so-called “moe-image” criticism.

Keywords:
representationalism, posthumanist performativity, human-oriented sexualism, humanogenderism, queer theory